



# Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連 —異文化接触場面を中心として—

米田, 晃久

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2012-03-25

(Date of Publication)

2014-02-03

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5544

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005544>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文審査の結果の要旨

氏名	米田 晃久		
論文題目	Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連 - 異文化接触場面を中心として -		
判定	合格 不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	水野 マリ子
	副査	教授	米谷 淳
	副査	教授	宇津木 成介
	副査		印
	副査		印
要 旨			
<p>本研究の目的は、Tolerance of Ambiguity (以下AT) 概念の再考を行い、ATの多次元構造を明らかにするとともに、典型的な曖昧場面である異文化接触において日本人大学生の行動とATとの関連を明らかにすることである。また、主観的に評価される曖昧さのみならず、客観的に曖昧性を評価することのできる確率的選択場面を設定し、曖昧さを忌避する行動とATとの関連を明らかにする。</p> <p>心理学では曖昧さに対する反応の個人差をAT概念によって捉えてきた。Frenkel-Brunswik (1949) は曖昧さにintolerantな者は価値判断の局面においてしばしば現実を無視し、性急な結論に達する傾向、また、他者に対して無条件の全面的な承認あるいは拒絶を求める傾向があったとした。彼女の研究のきっかけはユダヤ人迫害にかかわるエストセントリズムであったが、その後心理学の領域では、権威主義的性格やストレス耐性、強迫や抑うつ傾向と関連させた研究が進んだ。近年では、臨床心理学のみならず、医学、教育学、産業・組織心理学の分野でも研究が進んでいる。しかし、一方では、AT研究が曖昧さへの耐性の低さという否定的な側面に向けられてきたことへの批判が</p>			

あり、またATが当初考えられていたような一次元の概念ではなく多次元の構造を持っていることが示唆されてきた。(第1章)

本研究の第2章では、日本で開発された主要な2つのAT尺度の構造を検討した。同一の対象(99名の大学生)に対して友野・橋本のIIAS-R (Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale, Revised) と、西村のATAS (Attitude towards Ambiguity Scale) を実施し、相関分析と因子分析を実施することによって両尺度の構造の異同を検討した。その結果、IIAS-Rは曖昧さへの非寛容は測定しているが寛容性を測定するものではないこと、ATASは曖昧な状況に対する不安だけでなく、曖昧な状況に対する許容や享受など、曖昧な状況へのポジティブな態度を含むATの複数の次元について測定する尺度であることが結論づけられた。

第3章では多くの大学生が遭遇する曖昧な事態として留学生との異文化接触場面を選び、留学生との交流の有無と上記2つの尺度得点との関連を調べた。その結果、留学生交流サークルへの所属、留学生との交流体験などの行動は、ATの否定的側面と関わっているのに対し、ATのポジティブな側面とは関わっていないことが示された。つまり曖昧な状況を嫌う学生は留学生との交流を求めない傾向にあるが、曖昧な状況を受容し、あるいは曖昧な状況を積極的に求める傾向は留学生との交流を促進する要因ではなかった。

第4章では確率的に定義できる曖昧状況における選択行動について、上記2つのAT尺度得点の関連を実験によって調べた。実験参加者は110名の大学生である。行動経済学でも使用されるエルスバークの壺と呼ばれる選択課題において、実験参加者のATの否定的側面(不安)が高いほど曖昧な選択場面で忌避されること、ATの肯定的側面である受容が高いほど曖昧な選択に対して高いリスクを許容すること、具体的には高額な参加費を支払って選択に関与する傾向があることが見いだされた。

最後に第5章において総合的な考察を行い、ATを多元的に捉える必要があることを結論づけるとともに、曖昧さの評価の仕方(ポジティブ、ネガティブ、ニュートラル)と曖昧な事態への対処(接近、回避、待機)とを関連させた。

以上、本研究は従来、日本国内ではほとんど検討されてこなかった曖昧さ耐性概念の多次元構造を尺度上で検討しただけでなく、曖昧な事態における行動が複数の曖昧さ耐性の側面と関連することを示した点で新奇性と有用性に富むと考えられる。よって学位申請者の米田晃久は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。なお、一連の研究は日本感情心理学会、日本パーソナリティ心理学会等で発表されたほか、「鶴山論叢」、「国際文化学」に発表され、また「感情心理学研究」で一編の論文が査読中、また「人間工学」誌に投稿準備中である。

米田晃久(2010)「Tolerance of Ambiguityの多次元構造の検討」第18回日本感情心理学会大会発表(広島大学)

米田晃久・宇津木成介(2012)「心理学における『あいまいさ耐性』概念について」国際文化学 25号 95-103.

米田晃久(2012)「留学生から見たチューター制度-支援の現状と理想のチューター像-」鶴山論叢13号 掲載決定済み

(別紙様式 3)

## 論文要旨

氏名 米田 晃久

専攻 グローバル文化専攻

指導教員氏名 宇津木 成介 教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

**Tolerance of Ambiguity 概念の再考と曖昧な場面における行動との関連**  
—異文化接触場面を中心として—

### 論文要旨

本研究の目的は、①Tolerance of Ambiguity (以下、AT) 概念の再考を行い、ATの多次元構造を明らかにすることである。②その上で、典型的な曖昧な場面として、異文化接触を選び、日本人大学生の異文化接触時の行動とATとの関連を明らかにすることである。③また、主観的なレベルの曖昧さではなく、誰にとっても曖昧な場面となり得る確率情報を用いた選択場面を設定し、曖昧さを嫌い避ける現象である「曖昧性忌避」とATとの関連を明らかにする。①②③を通じ、ATの心理学的研究を行う。

日々の生活の中には多くの曖昧な場面が存在する。心理学では曖昧さに対する反応の個人差をATという概念で捉えてきた。Frenkel-Brunswik(1949)は、曖昧さに intolerantな者は価値判断の局面において、しばしば、現実を無視し、白か黒かをはっきりさせようとしたり、早急な結論に達する傾向、また他者に対し無条件の全面的な承認や拒絶を求める傾向があるとした。Frenkel-Brunswik がATを概念化してから、半世紀の間に多くの研究者がATの概念を用いた研究を行ってきた。ATとエスノセントリズムや権威主義的パーソナリティとの関連(Furnham & Ribchester,1995)、ATがストレスの評価に及ぼす影響(増田, 1998)、ATがストレスコーピングに与える影響(友野・橋本,2002)、ATと強迫傾向や抑うつ傾向との関連(西村,2007)等が示されてきた。AT概念を使用した研究は、臨床心理学、産業・組織心理学、医学や教育学、起業家精神との関わり等、多岐に及んでいる(Bors, Gruman & Shukla, 2010)。

しかしながら、AT概念の問題点も指摘されている。西村(2007)は、これまでのAT研究の多くが、曖昧さへの耐性の低さという否定的な側面に焦点が向けられ、肯定的な態度についての検討が不十分だと指摘している。また、Furnham(1994)は先行研究において使用されてきたAT測定尺度は一次元構造を想定して作成されているが、分析の結果、それらの尺度が多次元構造であることを指摘している。AT研究を進める上で、ATの多次元構造を明らかにする必要がある。既存のAT測定尺度がATのどのような側面を測定しているのかを明らかにすることで、ATと他のパーソナリティ特性や行動との関連を詳細

に検討することができる。

そこで、第2章では、本研究で使用するAT測定尺度の友野・橋本(2005)の「改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度:以下IIAS-R」と西村(2007)の「曖昧さへの態度尺度:以下ATAS」を同時に実施し、相関分析、因子分析を行い、次元構造の検討、加えてIIAS-RとATASの両者の測定するATの違いを検討した。

相関分析から、IIAS-Rは曖昧さへのIntoleranceを測定するがToleranceを測定するものではないことがわかった。因子分析においてIIAS-Rは多次元構造を示した。これは新奇性や複雑性といった曖昧さの質の違いにより因子構造が明瞭に分かれたと考えられる。また、両尺度のすべての項目で因子分析を行った結果、ATASと、IIAS-Rとは因子構造が異なることが示唆された。このような因子構造の違いは、場面限定をせず一般的な観点から作成されたAT測定尺度(ATAS)が、場面状況によっては、ATを測定する尺度として適合しないことを示している。また、場면을対人場面に限定して作成されたAT測定尺度(IIAS-R)で測定されたATを、曖昧な場면을限定していないATASで測定されたATと同一視することの危険性を示している。

第3章では、典型的な曖昧な場面として、日本人大学生の異文化接触場面を選び、日本人大学生の留学生との接触時の行動と、ATAS、IIAS-Rで測定したATとの関連を検討した。同時に過去の異文化滞在経験や留学生交流サークルの所属の有無によりATにどのような違いがあるか検討した。一連の分析において、有意な差が見られたATAS、IIAS-Rの下位尺度はATASの「曖昧さへの不安」、IIAS-Rの「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」、「友人関係における曖昧さへの非寛容」であった。曖昧さをポジティブにとらえる傾向であるATASの「曖昧さの享受」や「曖昧さの受容」はいずれの群間においても有意な差が見られなかった。つまり、曖昧さにintolerantであることは、異文化接触行動の抑制要因にはなるが、曖昧さにtolerantであることは、異文化接触行動の促進要因とはなっていないことが示唆された。

第4章では、誰にとっても曖昧な場面として、確率情報を用いたエルスバークの壺と呼ばれる選択課題を使用した。エルスバークの壺課題においては、多くの人が曖昧性を嫌い避ける「曖昧性忌避」と呼ばれる現象が起きる。そこで、曖昧性忌避とATの関連を検討するために、4種類のエルスバークの壺課題とATAS、IIAS-Rを日本人大学生に同時に実施した。相関分析から、曖昧さの程度が高い問題において、曖昧性忌避の有無と「曖昧さへの不安」、「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」、「友人関係における曖昧さへの非寛容」との間に有意な正の相関が示された。また、「曖昧さの受容」が高い者は、各選択肢に出す参加費の差が大きいことが示された。結果からATのネガティブな側面が曖昧性忌避を起こす要因となることが示唆された。加えて、「曖昧さの受容」は曖昧さの精査に、影響を与える特性であることが示された。

第5章では、本研究の総合的考察を行い、今後の課題を示した。AT概念を曖昧さへのポジティブ、ネガティブ、ニュートラルな評価と接近、回避、待機といった曖昧さへの対処の観点から多次元構造モデルを示した。ATの現実場面の応用としては、海外に派遣される業務を行う人材の適性を測る一つの指標になると考える。今後の課題としては、一つは曖昧さのポジティブな側面を測定する尺度の開発である。もう一つは、曖昧さ不耐性の改善方法の提案である。本論文は、従来、詳細に検討されてこなかった、ATの多次元構造を明らかにし、加えて、現実場面での個人のATと行動レベルの変数との関連を実証的に示した研究である。